
入院透析患者の内シャント管理に関連した 継続看護のための取り組み

宇佐美幸子、江畠恵美子、佐々木明美、松本和子、佐々木智美
村上久弥子、三浦景子、堀越 恵、小松文子
秋田赤十字病院 腎センター

Approach for continuance nursing related to shunt management in hospitalization dialysis patient

Sachiko Usami, Emiko Ebata, Akemi Sasaki, Kazuko Matsumoto
Satomi Sasaki, Kumiko Murakami, Keiko Miura
Megumi Horikosi, Fumiko Komatsu
Kidney Center, Akita Red Cross Hosipital

<はじめに>

当院では、内シャント（以下シャント）造設やシャントトラブルのため、入院透析を受ける患者が増加している。そのため、入院透析患者の透析後のシャント管理において、病棟看護師と連携を図り、個別性を考慮した細やかなケアの継続が求められている。

以前、透析後のシャント肢に血腫を形成した事例を経験し、継続看護の必要性を痛感した。今回、入院透析患者のシャント管理のため、病棟との継続看護に取り組み、成果を得たので報告する。

<用語の定義>

内シャント管理：入院透析患者の、透析後のシャントトラブルを回避するためのシャント管理方法

<研究目的>

シャント管理について病棟との継続看護に取り組み、効果を明らかにする。

<研究方法>

1. 研究デザイン：事例研究
2. 対象：意志疎通の可能な、シャントを使用している入院透析患者 3 名
3. 期間：平成 22 年 4 月～7 月
4. 場所：A 病院腎センター、B 病棟、C 病棟

5. 事例紹介

	事例 1	事例 2	事例3
氏名/年齢/性別	D 氏/50 代/女性	E 氏/70 代/女性	F 氏/60 代/女性
原疾患	糖尿病性腎症	糖尿病性腎症	慢性糸球体腎炎
シャントの部位 (種類)	右上腕シャント (人工血管)	左前腕シャント (人工血管)	左前腕シャント (自己血管)

6. データの収集方法

- (1) 対象患者、患者の受け持ち看護師および担当看護師に対し、研究目的と方法について口頭と紙面で説明し、同意を得る。
- (2) 対象患者の看護過程を展開する中で、以下のとりくみを実践する。事前に、入院病棟の看護師を対象に、勉強会を開催した。勉強会後には、それぞれの患者の個別性を重視した観察、看護記録の実践を行った。

取り組み① 病棟訪問

シャントトラブルの可能性がある患者には、透析日の夕方に腎センター看護師が病棟訪問し、病棟看護師と一緒にシャントの観察を行う

取り組み② ケアカンファレンス

適宜、シャント管理を中心とした看護について、病棟内でチームメンバーとともに実施する。

7. データの分析方法

- (1) 看護記録、カンファレンスノートの内容から、継続看護の実践につながる内容を抽出して分析する。
- (2) 取り組みを実践することが、透析後のシャント管理において、早期発見、シャントトラブルの減少に役立っているかを分析する。

<倫理的配慮>

対象となる患者へ研究の目的と内容を紙面と口頭で説明し、研究の内容は本研究以外では使用しないこと、同意を拒否しても不利益が無いこと、研究終了後はデータを破棄することを伝え、協力を依頼し承諾を得た。対象患者の入院している病棟看護師へ、研究の目的、趣旨、倫理的配慮を伝え、協力を依頼し承諾を得た。また、本研究は院内外の看護研究発表会において発表することも説明した。

<結果>

勉強会では、透析後のシャント管理や入院透析患者のシャントの種類や特徴について説明した。

病棟看護師からは、「シャント音の聞き方や音についての判断には自信がなかった。」との意見があり、不安を感じていたことが分かった。(図1は勉強会で使用したマニュアルの一部抜粋)

D氏は、病棟看護師と一緒にシャントの観察を行うことで、シャントについての共通理解ができ、個性性を考慮したシャント管理やケアを行うことができた。病棟訪問以外でも、病棟看護師からシャント管理についての相談や、電話での問い合わせを受けた。また、シャントトラブルを繰り返していたため不安が強く、腎センター看護師が病室を訪れることで、安心感を得ていた。ケアカンファレンスでは病棟看護師から、「病棟訪問時に、一緒に観察することで患者のシャントの状態を把握した上で、ポイントに沿って観察やケアができるようになった。」との意見も聞かれた。

E氏は、透析中の指導には反応が乏しく意欲的ではなかった。しかし、病棟訪問時に病棟看護師と一緒に関わっていくことで、「こうやって曲げると駄目なのよね。自分でもシャントの音を聞いて確認している。」と積極的な反応を得ることができた。また、病室にある多数のペットボトルを目にし、病棟看護師と共通理解のもとに、具体的な水分管理指導をすることができた。

F氏は、シャント発達途中での穿刺となり腫脹がみられたが、観察と状態に合わせたケアを継続した結果、シャントトラブルはなく経過することができた。

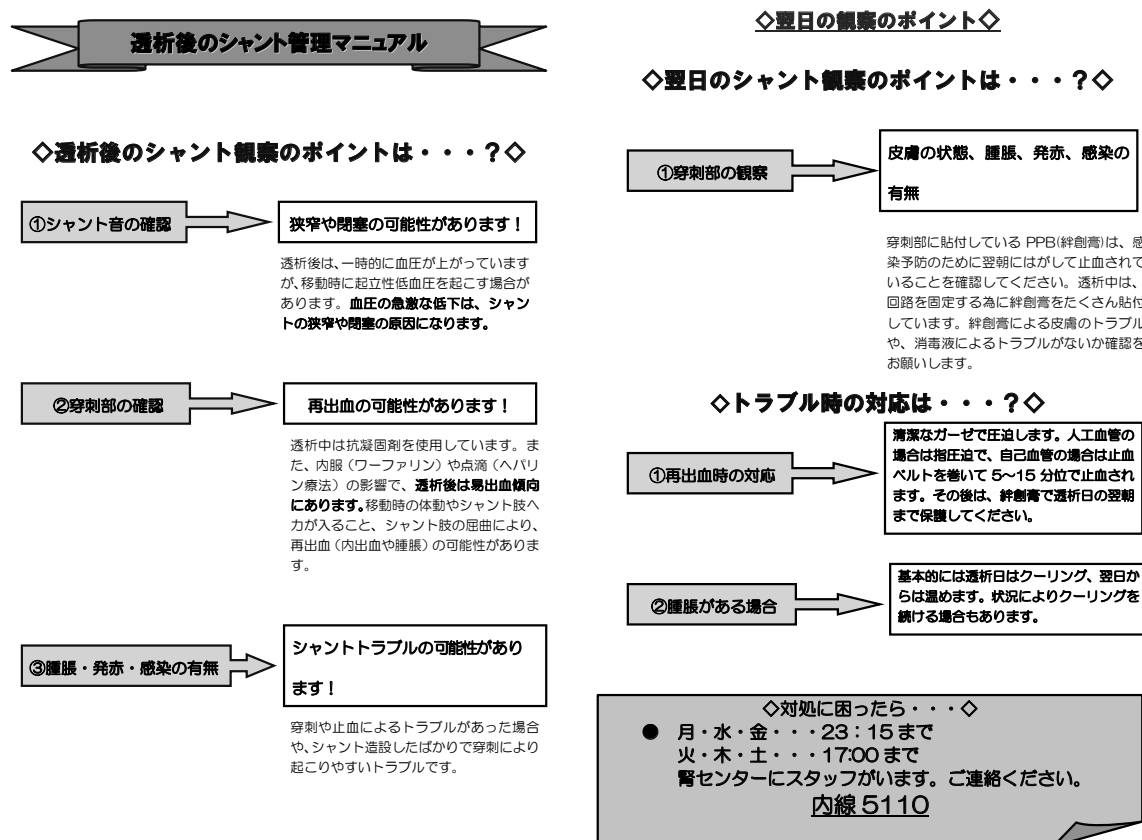


図1

<考察>

透析看護の中でも、シャント管理は専門性が高いため、事前に行った勉強会では、病棟看護師がシャント管理に不安を感じていることが分かった。専門的知識や技術をもつ腎センター看護師が病棟を訪問し、病棟看護師と一緒にシャントを観察することで、根拠に基づいたシャント管理やケアの方法を伝えることができ、病棟でも自信をもってシャント管理ができるようになった。また、病棟訪問やケアカンファレンスなど、継続看護のために積極的なアプローチを行ったことで、病棟看護師のシャントに関する知識や関心が深まり、細やかな観察やケアが可能となったと考える。

また病棟訪問は、シャントに不安を抱える患者には、安心感を与えることができ、自己管理に問題のある患者には、患者に合った具体的な指導を見出すことができた。病棟訪問時に生活指導を行うことは、病棟でも一貫した指導や支援を行うのに効果的だったと考える。

伊東は「関係部署と透析スタッフが双方の事情を話し合い、知り、情報を共有することが大切である。お互いの現場を訪れたり、患者と間近に接することが、患者のより深い人間性をつかむことにつながる¹⁾。」と述べている。これまで、腎センター看護師は、腎センター内でのシャント管理や指導を中心として行っており、部署外で専門性を発揮し看護することはなかった。腎センター看護師が専門的知識や技術を生かし、病棟看護師と一緒にシャント管理に関わることで、病棟でも個別性を考慮したシャント管理が可能となった。さらに、患者を中心に病棟看護師との相互理解を深めることができ、継続看護を充実させることにつながったと考える。

<結論>

1. 病棟看護師と一緒にシャント管理に関わることは、個別性を考慮したシャント管理が可能となる。
2. 病棟訪問は、患者に安心感を与えることや、具体的な生活指導を行うことに効果的である。
3. 病棟看護師との相互理解を深めることで、継続看護が充実する。

参 考 文 献

- 1) 伊東久美子：認定看護分野のトウディズ・ケア、ナーシングトウディ Vol.22 No.8：5-7、2007